
俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

サラ@リアでも友達がいらない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

【Nコード】

N8609X

【作者名】

サラ@リアでも友達がない

【あらすじ】

主人公・足立沙羅は、幼馴染の相川涼輔とともに雷門中に転校してきた中2のサッカー大好き少女。

サッカー部に入部するが、なんと次の日から一週間合宿に行くことになって……！？

たまーに、というかほとんどギャグっぽいと思います。

シリアスなんて……！ よほど重いときムードの時しか書けないぜ……。

都合上、南沢先輩が雷門にいます。

ギャグっぽいけどいちおう恋愛っぽくしたいなあ……とか。
サッカーしてることかほとんど無いよ！

全然原作のストーリーとは関係ないです。

オリジナルキャラが出てくるのは……もう分かってるか。うん。

まあ、そんな感じのラブコメディーです。

プロローグ：風（前書き）

ども、恋愛小説とか書けるわけねえと思ってたのに書いちゃった
サラです。

とりあえずどうぞ見てってください。

プロローグ：風

「へー、ここが雷門中か」

アタシは校舎を見上げていった。

アタシの名前は足立沙羅。あたちさわ

水色のショートヘアで、顔つきは男っぽいとよく言われる。

そのせいで、制服を着て登校しようとしてるだけで警察に捕まりそうになるほどだ。

「楽しみだね、沙羅」

アタシの隣でこう言った少年は相川涼輔あいかわりょうすけという。

きれいな金髪とメガネが、太陽の光を反射してきらきらと光っている。

いざ踏み出そうとしたとき、後ろから大きな声が聞こえてきた。

「うわああああああああ、ぶつかるうううううううう!!」

「「は?」」

ドッサーン!!

叫びながら走ってきた少年と思いつきりぶつかった。転校初日からこんな不幸続きで、大丈夫だろうか、少し不安になってくる。

不幸とは、まず登校中に電柱に真正面からぶつかって、途中で警察に捕まりかけ、その上逃げ回っているうちに道に迷った。

これはたぶん、アタシが星座占い・血液型占いのどちらも最下位だったからだろう。

「ふわあ!　びっくりした……って、大丈夫ですか!？」

茶色の天然パーマのような髪に灰色の目。

——　なんか、どこかで見た覚えが……。

アタシはそんなことを考えた。

ぶつかってきた少年は、まず飛び起き、こちらに声をかけてきた。

大丈夫、とアタシが返事をする、少年はほっとしたように胸をなでおろした。

彼はさっと立ち上がってから、二人の顔を見つめ、こう言った。

「もしかして、貴方たちって足立沙羅さんと相川涼輔さんですか？」

——何で名前を……？

当然の疑問を抱く。

「何で俺たちの名前を知ってるんだ？」

気持ちを代弁するかのように涼輔が言う。

「覚えて無いんすか？俺です、松風天馬です！！」

松風天馬。

そういえば……

「あ、こないだ河川敷で練習してた……」

「そうです！そのときボールを沙羅さんに拾ってもらって」

涼輔も納得がいったようだった。

「ところで天馬。お前、なんか急いでたみたいだったけど……」

そう涼輔に言われ、はっとしたように天馬が言う。

「やばい！俺、サッカー部の朝練行かなきゃ！じゃあ沙羅さん、

涼輔さんまた後で！」

すると天馬は風のように走り去っていった。

「松風天馬……。アイツ、雷門中に風、いや嵐を呼びそう……」

アタシは天馬の後姿を見送りながらそっと呟いた。

プロローグ：風（後書き）

……プロローグだからって短い気がするのは私だけだろうか。
天馬「んなことないし。それより作者は調子に乗りやすいからいい
ところより悪いところバンバン言ってるね」
ありがとーございましたーつづきも待っててくださいー。
天馬「誰も待ってる奴なんていないと思うよ」

1話：転入生。（前書き）

一日で一話書けるんだったら、すぐ完結しそっだな。
とりあえずどっぞ。

1話：転入生。

「はあ、疲れた」

俺は教室の机に突っ伏した。

「おいおい神童。お前それでもサッカー部のキャプテンかよ」

そう呆れたようにいうのは、親友の霧野蘭丸。

あ、そうそう。俺の名前は神童拓人。

さっき言われてたように、雷門中サッカー部のキャプテン。

「分かってるさ。でも、昨日は眠れなかったんだ。そつとしてくれよ」

そう答えると彼はさらに呆れたようだった。

「まあいいけどよ。あ、そういえばさ、さっき職員室前通ったら、担任と一緒に男みたいな女子がいたぜ」

何だそれは。

あ、これじゃ失礼か。

何だそいつは。

俺は、自分でも壊れて行っている気がしてきた。

「俺が思うに、転校生だと思うんだ。担任と一緒に居たんだから、たぶんうちのクラスだぜ」

「ふーん？」

俺はあいまいな返事をした。

まあ、どうってことないし。

俺がまた机にうつぶせようと手を伸ばすと、蘭丸はちょっと意地悪く笑んだ。

「たぶん、お前にとって刺激的な奴だと思っぜ」

「……？」

どういう意味だろうかと考えながらも、俺は机にうつぶせた。

その途端担任が教室のドアをあけ入ってきた。
くそっ、寝ようと思ったのに。

担任の隣には、どこかで見かけたような少女がいた。

制服じゃ無かったら、”少年”と言っても違和感は無かっただろう。
「えー。今日は転入生がこのクラスに来る。……って、言っていたか？」

『聞いてません』

クラス全員が息をそろえて言う。

俺は言わなかったけど。

そんな様子を見て、少年のような少女はクスクス笑う。

なんだ。笑うと女の子みたいじゃん。

「そうか。まあいいだろう。その転校生って言うのがこいつ、足立沙羅だ」

そう説明されると、沙羅と呼ばれた少女はニコツと笑った。

「はじめまして、足立沙羅です。趣味はサッカーと歌うことです。よろしくお願いします！」

沙羅と呼ばれた少女は、微笑みながら、年相応の元気さで言った。
なんだ。声は以外に女の子っぽいじゃん。

「よし、席は……神童の隣な。まあ、空いてる席なんてひとつしかないけど」

沙羅は俺の隣の空いてる席に座る。

きれいな薄水色のショートヘア、きりつとした瞳。

なんか、見方を変えれば美少女だな。

「よろしくね。たっくん」

「なっ……！」

沙羅は、こちらを振り返って言った。

『たっくん』なんて、親にも呼ばれたこと無いぞ！！
て、いうか何で俺の下の名前知ってたんだよ！！

まあ、サッカー好きなら知っておかしくも無いけど。

けど……けど……なんでそんなに馴れ馴れしいんだよ！！

「くくつ。やっぱたっくん変わんないね」

笑う沙羅。

「ほら、俺の言ってたこと当たったろ。お前にとって刺激的な奴だつて」

後ろから蘭丸が囁いてくる。

なんかイラッとした。

後で殴ってもいいかな。親友だけど。

「蘭丸お前——」

「そこうるさい。授業始めるぞ」

「はい——」

蘭丸と沙羅がとぼけたように返事をした。

——それが俺と沙羅との2度目の出会いだった。

場所は変わって、3年教室。

——あーあ。嫌な奴と隣になっちゃった。

俺は相川涼輔。

まあ、雷門中に転入してきたけど、一番嫌な奴と隣になってしまった。

嫌な奴ってのは、南沢篤士。

あれ？ 下の名前の『し』ってさ、あれで良いんだっけ？

そもそも『あつし』だったっけ？

まあいいや。

「よくねえよ」

あらっ？ 心の声聞こえてた？

まあいつか。

そんなことより。

「おい南沢。四六時中睨みつけてるようなことはすんなよ」

「ふん。その申し出、丁重にお断りさせていただく」

くっそ、あの態度が気に入んねえんだよ！！

「ところでお前、部活やっぱサッカーやんのか？」

「当たり前だ。沙羅が入るって言ったし、俺も入りたいし。何しろお前をからかえるしな」

「ふん。俺もお前のアホ面見てるの楽しいから、まあいいか」

「何だこのナルシスト野郎」

「そっちこそロリコンの癖に」

あ、イラッとした。

口っ！ ロリコンとか……べっ！ 別にそんなんじゃ……………
おっほん。

危うくツンデレっぽくなるところだった。

「このメガネ野郎！」

「キザったらしい女たらし！」

俺と南沢の視線に物理的な力があつたら、火花が散っていたであろう。

「おい南沢と相川！ 授業中にケンカはやめろ！！」

先生にそう注意されたからには、続けるわけにはいかなかった。

まあ、今やっているとこなんて、前の学校ではとくに習ったところだったので、特にすることも無かったが。

「この決着は後でつけてやる……」

南沢が独り言のように呟いたそれを、俺は聞き逃さなかった。

まあ、そんなことより俺が何で南沢を嫌っているか説明するか。

それは、今から5年前のこと。

俺と沙羅が公園でボールを蹴って遊んでいた。

と、そこに女子に囲まれてるリア充……つまり南沢がいたわけよ。
うん。

まあ、最初っから知ってたけどよ。南沢のこと。

南沢は女子を全部……じゃ無かった。

全員追っ払ってから俺らの方に来た。

何しにきたのかと思ったら、いきなり沙羅の体を抱きしめるじゃないか！！

沙羅、ワケが分らず気絶。

俺、超激怒。

南沢、腹を抱えて笑い出す。

笑い出す南沢を見て、俺の怒りゲージは満タン。
思わず殴りかかった。

それを見てた女子から悲鳴が上がった。

「いやああ！ 南沢君があ！」とか、「きゃあああ！！」とかさ。

うん、よく考えるとあいつら、このクラスの女子じゃん。

まあいっかそんなこと。

南沢はよけようともせず俺の拳に当たり後ろへ飛ぶ。

そしたら、動かなくなっただんで様子を見に近づいた。

そしたら顔をパンチされた。

くっそ、今思い出ただけでも腹が立つ！！

パンチを喰らった俺を見てアイツは一言。

「人を騙すことも、実力のうちだよ。メガネ君」

そのままあいつは去っていった。

あー、今思い出したのがいけなかった。
無性に殴りたくなってきた。

あーイライラする。

イライラする。（大事なことなので2回言いました）
ふと隣を振り向くと南沢は眠っていた。
うわっ、こいつ……。

起こしてやろうと一発殴る。

「いたっ！」

そう小さく言い、目を覚ます南沢。
ざまあみたか。

「お前……」

あ、完全に怒りスイッチ入ってるな。
まあほっところ。

「相川のばっきゃろおおおおお!!」

その声と同時に、今日の全ての授業の終わりを示す鐘がなった。

よし、帰るか。

1話：転入生。（後書き）

はい。神童・蘭丸・南沢の三人、キャラ崩壊してます＼（＾o＾）／
絶対南沢叫んだりしませんよね。

蘭丸もそんな意地悪そうじゃないし。

神童はもうだめだ。

気品が感じられなくなってる。

まあいいや。（よくねえ

感想とかくれたら、部屋中踊って回ります。（迷惑だ。

それでは近いうちに会えることを祈りつつ。

2話：異様な入部希望者（前書き）

今回も（？）シリアス場面は見られません。
ギャグだらけですがどうぞ。

2話：異様な入部希望者

キンコンカーンコンと、今日の授業全てが終わる鐘の音と同時に、南沢先輩の、

「相川のばっきゃろおおおおー!!」

という声が聞こえたのは気のせいだろうか。

隣の沙羅にも聞こえたらしく、彼女も少し困惑気味だった。

「ねえ、今の叫び声聞こえた？」

「うん。南沢先輩の声だった」

「なんかどつかで聞いたことある気がする……。とりあえず、相川って言うのはアタシの兄さんみたいな人の事だよ。きつと」

「誰だよそれ」

俺が聞くと、蘭丸が呆れたように言い返す。

「お前、そっちも忘れたのかよ。沙羅といつも一緒にいる、お兄さんみたいな人だよ。相川涼輔って人」

「ふーん」

まあ良い。そんなことより、俺は聞いてみたいことがあった。

「沙羅って部活何入るんだ？」

そんなことかと言うな。

「え？ もちろんサッカー部に決まってるだろ！」

沙羅はカバンを肩にかけながら返事をする。

そうやってかけるんだ、カバン。

たまーに、女の子らしいところあるんだな。

最後の『だろ』で台無しだけどね。

「ふーん。ていうか決まってるないし」

「アタシの中じゃ決まってるの!!」

「あー、ハイハイ分かったよ」

そう答えると沙羅は満足したようだった。

「分かればいいんだ。それより早く部屋連れてってよ！」
急かす沙羅。

腕を掴んで振り回すんじゃない。
痛いだろ。

それを見た蘭丸が、クスツと笑う。

「それじゃあ行くか」

「本当!？」

その時沙羅が腕を放して突き飛ばしたために、俺はイスから転げ落ちた。

くっそう。

「やったあ! 早く行こうたつくん!」

あーもうその呼び方やめろと思ったけどまあいいや。

「分かったよ」

そうして俺ら三人は、沙羅に腕を組まれ廊下に出た。

「久しぶりだな、お前ら。沙羅、俺のこと忘れてなかったか？」

そのすぐ後、上から声が降ってきた。

声の主のほうに顔を向けると、そこにはメガネをかけている金髪の上級生が立っていた。

上級生かは知らんけど。勘だよ、勘。

まあ、背が高いからっていうのが理由なんだけど。

「涼輔! 忘れてないよ!!」

沙羅はするつと俺と蘭丸の腕から手を離す。

するとそのままその上級生にダイブっ!

……後ろに倒れた。

すると、その後ろに南沢先輩がいるのが見えた。

あ、居たんだ。

「何気にひどいな、お前」

あ、心の声聞こえてたんだ。

すごっ!

「そいつは心の声、自分の悪口しか聞こえな——グフウ」

涼輔と呼ばれた上級生の声が最後まで聞こえなかったのは、南沢先輩が腹を蹴ったからだ。

「うるさい黙れロリコン野郎」

「はー！？ それはお前も一緒だろー！！」

ヒートアップする涼輔さんと南沢先輩のケンカ。

それを止めに入る沙羅。

愉快そうに見てる蘭丸。

よく分からないまま立ち尽くす俺。

……何だこの構図は！？

「この金髪メガネ！！」

「変な髪形！！」

「何だと！！ 授業終わりに叫んだ馬鹿野郎！！」

「くウツ……」

あ、やっぱり叫んだの南沢先輩だったんだ。

なんかウケる。

「何だこの金持ち野郎！！……ってこれじゃ悪口じゃねえな」

「また心の声聞こえてたんですか。とりあえず何があったか知りま

せんが、ケンカやめてくださいよ。こんな廊下で」

俺の一言で二人の先輩は、お互い掴んでいた手を放した。

俺ってそんな説得力あること言っただけ？

「まあいい。とりあえず神童。お前俺のこと覚えてないだろ」

図星

俺キモい。

「たつくんさー、涼輔どころかアタシのことも覚えて無かったよ！
全くひどい奴だ。」

「お前ッ！」

俺は無意識のうちに沙羅の口を手で塞いだ。

「むがつ！？」

ぶつと噴出す涼輔先輩。

「沙羅お前まだそんな風に呼んでんのかよ」
まだ腹を抱えて笑っている。

「まあいいや。それより覚えてないんだったら自己紹介と行きますか。俺は相川涼輔。まあ、3年。好きなことはサッカーとか。よろしく」

そう簡単に自己紹介をした涼輔先輩は、少し微笑んだ。
笑うとカッコよさが増すな。

「それよりさー、早く連れてってよ、部室！　せつかくサッカー部入ってあげるんだからさ！」

「上から目線やめろよ沙羅。神童連れてってくれなくなるかもしれないぜ？」

蘭丸が例の意地悪い笑みを浮かべ言う。

「分かったよ。とりあえず早く行こう！」

沙羅はまたも言う。

とりあえずそこにいた皆でサッカー部室に向かった。

サッカー部室に着いた。

早いわけじゃない。

作者が飛ばしただけだ。

まあ、アタシはどうってこと無いけどね！

「部室とかってこつちに別にあるんだ」

いままで思ってたことを口にする。

「まあ、そうなんだ」

神童、言い方変えればおばさんぽくなるぞ。

そっだったんだみたいな意味で。

ウィーンと、ドアが開く。

「あ、キャプテン達！」

部室にいた一人、もとい天馬が言う。

「天馬だー」

アタシは感情の無い声で言う。

「沙羅先輩！ 涼輔先輩！ ……ていうかそんな無感情な声で呼ばないでください」

お、天馬でも気づくんだ。

当たり前か。人間なんだし。

「先輩たちがここに来たって事は、やっぱりサッカー部に入るんですか？」

「当たり前だ」

涼輔と声が合ってしまった。

まあいいけど。

「やった！ 沙羅先輩たちとサッカーできる！」

天馬は飛び上がらんばかりに喜んでいる。

そんなにうれしいのか。

「んで、お前らはその人のこと知ってるみたいだけど、俺らは知らないんだから紹介しろよ」

褐色の肌をした、水色っぽい（？）髪の子がイラついたように言う。

「分かったよって言うかもとよりそのつもりだったし。こつちの水色の髪のは足立沙羅っていつて、俺と同じクラスに転入してきた。それで、その沙羅の隣で南沢先輩とにらみ合ってるのは相川涼輔先輩。南沢先輩と同じクラスだそうです」

そう神童が説明し終わると、皆納得したというかなんというかって顔をした。

まあ、そうだろうな。

自分で言うのもなんだけど、こんな異様な二人組みがいるんだもん。そりゃあんな反応してもおかしくない……………と思う。

すると部室のドアが開く音がした。

振り返ってみるとそこにいたのは……

「なっ、沙羅！」

あ、先に言われちゃった。

まあいいか。

「どうしたんだ鬼道、知り合いか？」

「知り合いか、じゃ無いだろう！ 覚えてないのかこのアホ！」

「お前！ アホっていうな！ 変な髪形の癖に！」

「何だと！ このサッカー馬鹿！」

「うるさいシスコン！」

あれ、このパターンどこかで……？

「あー、もう二人ともやめてー！！」

二人の後ろにいた紺色のウェーブヘアの女性がケンカを止める。

「もう、なんでこんなところでケンカできるのか知りたいくらいよ

！ 子供の前でくだらないケンカしないで！」

「あ、ああ」

あ、このパターンどこかで見たことあると思ったら涼輔と南沢先輩のケンカと似てるんだ。

そんなのはどうでもいいや。

「それで鬼道。どこで見つけたんだっけコイツ」

あ、コイツ呼ばわりされてしまった。

別にいいけど。

「コイツ、この前天馬と一緒にいただろ。思い出せ」

「あ、そういやいたなあ」

すっごいのんきだな、おい。

「んで、それが何でここにいるんだよ」

「ちよっ！ それ呼ばわりとかひどっ！」

「まあ、いいじゃん。それより何でここにいるんだよ」

だめだ。どうやっても説得できるような相手じゃない。

「もちろん、サッカー部に入るためです！」

「俺もです！」

あ、涼輔忘れてた。

別に涼輔の影が薄いわけじゃないんだけど、周りの人の影が濃いか
らさ。

「おい、俺んとこ忘れてないよな。沙羅」

げっ、気付かれた。

「顔に出てるぜ」

くっそう蘭丸め……。

「何でサッカー部？」

田堂さん、質問の意味がわかりません。

どうやっても今の会話からその質問に繋がらないんですけど

「別にいいじゃないですか」

とりあえずそう答えておく。

「ふーん。お前らサッカー好きか？」

はっ？

意味がわからず目を白黒させる。

「おい、目が点になってるぞ」

蘭丸のやろっ、そんなことしつとるわ。

「三秒以内に答える。さーんにー……」

うわっやばい。

「「サッカー好きです！」」

涼輔ときれいにハモった。

「よし、なら良いや。それと、明日から一週間合宿行くぞ」

『はああああああああああああ！？』

アタシと涼輔どころか、この部屋にいる円堂以外の人物ほとんどが叫んだ。

「お前、今考えたわけじゃないだろうな？」

鬼道、ナイスツツコミ。

呼び捨てなのは放って置いてね。

「んなわけあるか。ただちよつと驚かそうと思ってただけ」

「俺に位は言えよ。いきなり過ぎるじゃないか」

「まあ良いじゃん」

「良くない。はあ、めんどくさい……」

お前ら、お笑いやればいいんじゃないの？とか思ったのは忘れよう。

「合宿、かあ……。しかも一週間……」

「転校二日目とか笑え……。ないか」

涼輔は驚きを通り越して呆れたように言う。

「でもさ、サッカー部の皆と仲良くなれるチャンスだぜ？ 頑張れ」

何をだよ。

何を頑張るんだ。

いまいち何言ってんだかわからん。

「ったく、やっぱ理解してねえんだろ。お前さ、友達つくんの苦手だったつつか苦手じゃん？ だから、さ」

涼輔はちよつと笑いながら言った。

なんか、心配してないような言い方だな。

ま、いっか。

友達作り苦手なのは事実だし。

「まあ、そういうことになるけど、今日も練習始めるぞ！」

『はい！』

「……って、アタシたち放置かよ！」

「落ち着け。アイツはまあほつというて、お前ら初心者じゃないんだ

る？ ポジションは？」

「俺がMFで、沙羅はGK以外なら何でも大丈夫……だったよな？」

「え？ あ、うん」

いきなり話振られたんでびっくりしたけど、まあいいや。

「でも、まあやれていわれたらできるけど、ほとんどはFWです」

「そうか。まあ、これに着替える」

そういつてマネージャーらしき女子からユニフォームを受け取り、アタシたちに差し出す。

「着替え終わったらグラウンドに来いよ」

アタシの手に無理やり押し付け、鬼道は去っていった。

「なんか、無愛想つつつか……。まあいいけど」

「それより早く着替えていこうぜ？」

涼輔は鬼道に会えて売れしそうだ。

余談だが、涼輔は鬼道にスッゲーマジで懂れてる。

……なんか、キモい。

「あ、あの……」

張りのある声が掛けられた。

「ん？ 何？」

アタシが振り向くとそこにいたのは青いショートヘアの女の子。

「ふ、二人ともここで着替えるんですか？」

遠慮がち、というより少し驚いたように言う。

「そうだけど？」

「ええ……」

女の子は何故か引いてるようだ。

「なんか、ダメ？」

「で、でも、男の人と一緒に着替えるんですか……？」

「あ、そういうことか。別にアタシは気になんないけど……」

「んじゃ、俺は行くぜ」

『早ッ！』

涼輔の早着替えは知ってたけど、なんかすごい早い。

「先行つてるぞ、沙羅」

そう言い残すと、涼輔はさっさと行ってしまった。

まあ、いいけどさ。

それでアタシも着替えてグラウンドに向かった。

「あ、そういえば名前言つてませんでしたね。わたしは空野葵って
います。よろしくおねがいます！」

さっきの青い髪の女の子が明るいい声で自己紹介をする。

すると連鎖したみたいにほかの人も自己紹介する。

まあ、普通か？

「アタシは瀬戸水鳥。んでコイツは山菜茜。とりあえずよろしくな
！」

「おっけー。よろしく！」

なんか、水鳥とは気が合いそうだな。

2話：異様な入部希望者（後書き）

ケンカシーンが多い気がする。

そして神童のキャラがどうしようもなくおかしい。

拓人「公式のキャラにしてくれよ……」

作者「却下」

蘭丸「おい、俺のキャラは意地悪じゃないんだが」

作者「知らん」

天馬「作者俺より年下の癖に何いばってんだよ」

……これやってるといろいろめんどくさいんでさようなら。

作者除く三人「強引に終わらすんじゃねえ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8609x/>

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

2011年11月16日22時01分発行